

※ 白彊前進…自ら努め励み、前に進むこと(校歌3番の文言から)

ドキュメント 生徒総会

生徒会担当 石川 哲



「絶対やりたいんです。」

議会でおはようハイタッチが否決された後、森本生徒会委員長は力を込めて訴えた。

今日の生徒総会では、議会で圧倒的多数で修正案が通った状況で、どうしてもやりたい森本さんの思いをどう訴えるかが課題だった。案の定、修正案に賛成の声が上がる。生徒会委員の中にも修正案に賛成する声聞こえてきた。

修正案は「ハイタッチ」を「笑顔」に変える、その意義についての主張だった。

「ハイタッチをすることが目的になるのではないか」「まずは笑顔からあいさつ」「ハイタッチをふざけてしない人がある」などの意見が出された。その中で3年生の武村さんが「相手とのコミュニケーションをすることが大切なことからハイタッチをして相手と目を合わせてあいさつすることが大切なのではないか。笑顔だけでは不十分」という意見を出した。提案者である森本さんは「最初をから低い目標でやってもボーダーは超えられない。すぐにはできないかもしれないけど、だからこそやる意味があるのだ」と訴えた。会員の判断は修正案の否決。原案が承認された。

今回は生徒総会に登下校バスマナーについてのパネルディスカッションを計画した。これは70周年記念で野澤さん菊地さんら生徒会役員と卒業生の先輩方とのやりとりの中で議題の一つとして出されたものだった。その中で「先輩に聞く前にちゃんと話し合っているのか」と問い返されていた。この問題に真摯に向き合うことが今年度の生徒会に求められていることだと考えていた。

事前の調査アンケートからは4割近い生徒からマナーやルールの違反の申告があった。一方、席を譲るや運転手に挨拶をするという良い行動もたくさんあった。それを踏まえて、プレゼンで示しながらパネラーは自分の意見を訴えた。正直フロアからどのような意見が出るかは分からなかった。だが、フロアからの意見は自分事として捉えている意見ばかりだった。特に3年生の齋藤さんが、昨日の出来事を紹介してパネリストに意見を求めた。「昨日バスの後ろでかたまって話している5、6人の生徒に注意したけどそれがどうしたんだというふうに言って最後まで直さなかった。自覚があっても直さない事実がある。パネリストの皆さんはどう考えるのか。」と。

最後、パネリストが一人ずつ今回のパネルディスカッションについて意見を述べていく。その中で三学年委員長の渡邊薫平さんが最後にこうまとめた。

「僕は登下校のマナーを向上させるために1つやることを宣言するという提案をしました。だから僕は、登下校のマナーの悪い生徒に声を掛けることを宣言します。僕に声をかけられないように一人一人が1つやることを宣言して、少しずつでもやっていけば、必ず附中のマナーがよくなると思います。」

自分の提案をいい放しにするのではなく、自分事として他者のために取り組もうとする姿、これが真の附中生なのだと感じた。



リーダーたちの言葉 そして決意

だから、「マナーを守れ。」

生徒会委員長 森本 晃弘

「登下校時にマナーを守れ」という言葉はよく聞くが、なぜ守らなければいけないのか。附中生の中にマナーとは何かを考えたことのある人がどれくらいいるのだろうか。「附中生はもう少しマナーを守るべき」と言われるのはどうしてか。

それは、地域の方から見て、私たち附中生の行動の中に容認できないと感じられる場面があるからだ。マナーは他者への心遣いの発現であるから、マナーを守るべきと指摘されるということは、社会一般から見てその人の心が未成熟あるいは不十分であると指摘されていることに他ならない。

他者への心遣いができるようにもっと自己の内面を成長させる必要がある。もっとも、マナーを守らない人の中には、それがマナー違反だと自覚せずに行動している人も多くいるのではないだろうか。そのような人にマナーを守るように言っても、自分はセーフと思っているから治らない。

では、どうしたらいいか。私は他者がどう思うか自らの行動を俯瞰し、心遣いが必要でないか考える習慣を付けるのがよいと思う。仲間と過ごす登下校は楽しい時間であり、気分が高揚して周りが見えなくなってしまうこともあると思う。そのようなときにこそ、私たちの行動が他者への心遣いに欠けていないか、落ち着いて考えるべきだと思う。

マナーの問題は各自の心の問題であるし、その基準が統一しづらいことから一律に是正することは難しい。でも、私はマナーについて附中生各自が考えられれば、問題点に自発的に気づき、考え、行動することができるはずであり、他者への心遣いに欠けることはなくなると考える。そして、指摘されるような悪いマナーがなくなれば、普段からいい行動をしている附中生の方が多いのだから、地域の方に附中生本来の姿が伝わると信じている。

Manner

3学年委員長 渡邊 薫平

先日の登下校時のマナーについてのパネルディスカッションを受けて、皆さんはマナーの改善に向けて努力できているのでしょうか。附中の教育目標の中に「自ら考え行動する」というものがあります。つまり、考えるだけではダメで、それを基に行動しなければいけないのです。

ディスカッションから1週間ほどが経ちましたが、僕はマナーが少しよくなったと思います。バス内で五月蠅くしたり、道に広がって歩いたりしている姿があまり見られなくなりました。これは素晴らしいことですし、皆さんが「考え」を「行動」に移せている証だと思います。良いところを増やしていけば悪いところが一層目立ちます。このように良いところを増やし、それらを伸ばしていくことが意識を前向きにし、マナーの改善につながると思います。逆説的ですが、「悪いところ」を直すために「良いところ」に注目すべきだということです。

では、「良いところ」とはどのように増やせばよいのでしょうか。「マナー」という言葉について考えてみました。マナーは英語で「manner」です。最後の「er」を広く「人間」と捉えると「manner」は「人間的な行動をする人」つまり「道徳的な行動」と解釈できます。この「道徳的」というのがマナーの本質ではないのでしょうか。僕はパネルディスカッションで「周りの人に迷惑をかけないことが大切だ」と言いました。こんな論語があります。

利に放りて行えば、恨み多し

利益ばかりを求めすぎると、人の恨みを買うことが多い、という意味です。つまり、周りに迷惑をかけないことは周りの人だけではなく、自分にとって大切なことなのです。周りに配慮した道徳的な行動、これこそが良いところを増やし、伸ばしていく上で意識すべきことだと思います。

最後に、冒頭で「マナーが少し良くなった」と書きましたが、これはまだ完全に良くなったわけではないということです。附中生一人一人が附中の一員ですから、一人でもマナーが改善されない人がいれば、附中のマナーは良くなったとは言えません。附中正全員で完璧なマナーを目指して努力していきましょう。

「不言実行」が、しばしば人としての理想の姿と言われる。しかし私、中村は「有言実行」こそが最も厳しく、難しい姿だと考える。なぜなら、宣言することで周囲からの期待が一気に高まるからだ。結果、不実行ともなれば、途端に逆風が吹き、厳しい立場に追い込まれることになるからだ。リーダーの2人がすごいのは、これらのリスクを覚悟の上で、皆に「意識変革」を呼び掛けていることだ。

今後の附中生の振る舞いを大いに注目し、期待している。(文責：教頭 中村雅芳)